

づけているものだ。この「カーボベルデ人」という言葉から、ポルトガルという国家の境界をこえた、この惑星の各地域とのつながりがよく見える。「記憶」はブラジル、アフリカと各地に飛び火し、一見すると直接つながりのない話の端々に、人間の衝突・混交・混成・重合によってつくられた“曼荼羅”が「代弁 (represent)」されている。

リスボンで出会った研究者たちからは、ポルトガルは、いまや、ブラジルという「大国」をはじめとした旧植民地国のおかげで、地球の各所に広がる“曼荼羅”の翠点として生きる道を与えられているという理解があることが伝わってきた。興味深いのは、旧植民地国に対する特権意識でも、植民地主義への「贖罪」でもなく、衝突・混交・混成・重合してしまった他者として敬意を払っている（「これらの地域が存在しなければ自分たちのヨーロッパ内での立場はもっと悪くなってしまっただろう。ポルトガル語を話し、リスボンを移動の拠点としてくれ、文化や情報、商業のつながりを維持してくれていることがとてもありがたい」と考えている）ことが伝わってくるのだ。しかしながら、「植民された側」「無人島につれてこられた側」は、グローバリゼーションの大波にどのように応答し、現在をどう生きているのだろうか。出生率が高く、若年層の比率が高いカーボベルデでは、もはや独立以前の生活を識っているひとたちは少ないはずだ（だとすると「記憶の共同体」としての「カーボベルデ人」はいまどうなっているのか）。リスボンからプライアまでの“旅／フィールドワークする社会学”のなかで、現在を生きる「カーボベルデ人」についてメルレルとの間でおおよそ以下のようなことを考えた。

#### （宿屋の主人のフィロソフィー）

道路をどのような形でどこまでつくるかは、もちろん政策によるものだが、その結果、人や物資の移動・交換のあり方にも大きな影響をもたらし、見事に、境界線、「切れ目」をつくっている。そして、「切れ目」の「内側」においては、この「マクロ・トレンド」についていけるひととそうでないひととの間の分岐が生じて、すでにその過程にまきこまれ最低限の生活も維持出来なくなる。そして、各所から、「上昇」への「野望」をもったひとびとが、都市部へとやって来る。プライアのホテルにおける「欠落」は、どうも経営者個人の考えにもあることが分かってきた。彼女は、プライアの歴史的な中心街に位置するホテルのほとんどを所有し（直接的に経営していなくても建物を所有していたり、出資していたり）、さらにレンタカー会社、旅行代理店を営んでいる。ホテルのフロントには、観光を学んでいる途中の専門学校生や一切の接客業の訓練を受けていない10代の女性を使用し、経費をおさえている。雇用されているひとたちに自己裁量の範囲はほとんどなく、こちらからランプやトイレトーパーなどの不具合を指摘してもそのまま放置されてしまい、そのたびごとに直接女性経営者のところに話に行かなければならない。カーボベルデ大学からの電話をとりついでもらっても、電話があったことはかろうじて教えてくれるが、何時頃、だれから、相手の番号などといった必須の情報はすべて抜

け落ちている。

エスパルゴスやミンデロの宿にも「不具合」はもちろんあったが、遠来の客をもてなすという雰囲気は存在していた。ところがここでは、相手から出来るだけ金銭を搾り取ろうという姿勢が透けてみえる。1分でも長く逗留していたらすぐに電話がかかってきて、翌日分の料金を全額徴収するといわれる。これでは「二度とここには来ない！」となってしまうが、歴史的な中心街のホテルはどこにいても同じ経営者のもので、彼女の考えが貫かれており、他の選択肢がない。「ビーチで日光浴をしてその後ゴルフをするためなら、新市街につくられたアメリカンスタイルの海浜リゾートホテルに、ヨーロッパの諸都市なみの料金を支払って泊まればよい」のだが、調査に来た私たちの場合にはそのような選択肢がない。この時期には大量のフランス人の観光客がフォゴ島やサント・アンタン島の山に登るためにやって来ているが、彼らは、一泊だけをこの女性経営者のホテルで「やり過ごし」、二軒あるフランス人レストランのどちらかで食事をして、「この連中についての悪口」を「文明社会の仲間たち」と出し切ってから、出来るだけ早く、近隣の島の「無垢で豊かな自然」を求めて移動していく（イタリア人レストランなどもこの地で同じ機能を果たしている）。

しかし、この女性経営者は、最初からこのような考えを持っていたのだろうか。最初は、もっと地道に生業を営んでいたのかもしれない。それが、ヨーロッパ諸国の「バカンスの波」にまきこまれ「発見」されたことで、「移民しなくても成功する可能性」が見えてきた。あらゆる手段を使って蓄財し、この地で「成功」しようとする人間も出てくるだろう。カーボベルデの農村部から都市部へ、さらに海をわたっての移民の流れは、連綿とつづいている。この流れに加えられた新たな要素は、地元へのこっているのに、これまでの生活のあり方（たとえば共同耕作や相互扶助によってかろうじて暮らしていくという共同性）から「離脱」して、「グローバルな競争」へと参入していこうとするひとびとの登場だ（彼らは新市街に周囲から隔離した高級住宅を建設する）。プライアのダウントOWNへの「移民」も、「成功」あるいは「貧困からの脱出」を夢見てやって来るひとたちだ（彼らもまた、新たにこの地とは隔離した「スラム街」をつくっていく）。旧市街で「ふつうに暮らし」ていた若者たちも、缶コーヒー1本分くらいの水で車を洗車をしたり、街路で靴磨きをして小遣い銭を手に入れるという生活から、「もっとチャンスがあるかもしれない」と鼓舞されて、新しく出来たマンション程度の大きさの「最新の情報が学べる専門学校や私立大学」に通うことを考えるようになる。プライアの中心街では、無線LANが無償で提供され、市民はパスワードさえ確保すればこれが使用出来るが、まずそのまゝにパソコンを買う必要がある。これまでの生活からは考えられないような費用が、携帯電話料金やパソコンや液晶テレビや学費に蕩尽されていくことになる。欲しいものはすべて、この地では作ることが出来ない。すべては輸入に頼るしかない。

なにかが「欠乏し、困窮し、貧困である」ことの現れ方は、もはや「絶対的な不足」だけで

はない。都市部では、子供たちまでが最新の端末を携帯し、「ケーキの美味しい店」に通う。アスファルト道路から離れた集落では、手作業で可能な最低限の農業をするために、国がつくった海水からの精製水が届く共同の水道まで、子供たちが遠くからロバをつれて水を汲みにいく。首都のなかでは、かつての中心街であるプラトー（高台）が「空洞化」し、大使館街と海浜リゾート地、シーフードレストランと新築の高級住宅、さらにはアスファルト道路の突然の「切れ目」の間の石や煉瓦や木がごちゃ混ぜとなったバラックに、「移民（ニューカマー）」たちが棲息している。

### 3-4. カーボベルデの「ヨーロッパ人」

選択は、私たちの時代の不可避の運命である。どこに物理的に居を構えていようとも、私たちはいつも同時に、ニューヨーク、パリ、あるいはロンドン、サンフランシスコ、東京といった、現実のあるいは想像上の大都市の住人である。大都市は、相互に依存しあう高度に複雑／複合的な惑星システム (highly complex planetary system) の端末である。……あるシステムから別のシステムへと動くとき、ある時間から別の時間へと経過していくとき、また、単に行為するというだけのときも、選択を強いられるのである。……この努力は、終わりのない螺旋となって、私たちを疲労困憊させることになるのだ

A. メルッチ <sup>21)</sup>

(過剰な「選択のパラドクス」)

他方で、くり返しカーボベルデへとやって来る「ヨーロッパ人」たちは、どのような現在を生活しているのだろうか。サンティアゴ島のシダーデ・ヴェーリャのレストランを経営するイタリア人夫妻 <sup>22)</sup> の店で、カーボベルデの伝統的な魚料理を食べたときのことだ。従業員の女性二人はきびきびと働いている。建物や設備は古かったが、手入れがいきとどき、その細かな配慮は、ひとつひとつの器具や食器からよみとることが出来た。

イタリアの名門大学の文哲学部を卒業し銀行員として長く働いていた60代半ばの店主は、退職後、世界各地を移動して暮らそうと考え、モザンビークなどいくつかの土地で暮らした後、カーボベルデにやって来た。インターネットのHPを開設し、そこでは、旅や移住を目的としてカーボベルデにやって来るひとたちに情報を提供し、同時に、カーボベルデ・クレオール語の辞書も作成している。話し言葉としてどんどん変化していくクレオール語は、紙ベースの辞書よりも、複数のひとたちの書き込みによって改訂されていくWEB版のほうがよいと考えたからだ。「カーボベルデで金儲けをしようとする他の起業家たちとはちがって、最低限の暮らしが維持出来る程度の稼ぎがあればよくて、自分たちはいつか別の場所に出て行くのだから、

ここで働くカーボベルデのひとたちが、いずれは独立し、自分の店をもてるようになればと  
思って育ててきた。そろそろカーボベルデから出て行こうと考え、実によく成長した二人の女  
性従業員に経営権を譲ろうと考えた。しかし彼女たちは、『それは責任が重すぎる。私たちは、  
従業員のままがいい』と言うので少しがっかりしたよ。そこで、自分たちのHPで、経営を引  
き継ぐひとを募集したところ、いま君の向かいにいる男がやって来たのさ」。

ちょうどこの地に滞在していた40歳前後のイタリア人男性は、装飾物に金箔を貼り付ける  
技術の特許をもつ会社を父親から譲り受け、「オーナー経営者」として働いており、ファッション  
業界から重用される仕事をしてきた。「上海やドバイなどで超高級ホテルに泊まり、ひたすら  
儲かり、貯まった金の使い道も思いつかず散財をくり返していたけれど、この『華やかで虚し  
い』暮らしから、自分を切り離したいという願望が徐々に育ってきたんだ。ブラジルにいった  
ときも、移り住めないかと考えたけど、肌にあわなかった。ところが、はじめてカーボベルデ  
に来たらとても気に入って、会社を手放しここに来たいと考えるようになったんです。しかし、  
正直言って、数年ここで暮らした後どうするかは、まだ自分でもわかりません。しかし、店主  
夫妻と同じく、自分にとって『気持ちのよいこと』『自分らしい本当の生活』が出来る場所を探  
しています。カーボベルデにやって来るイタリア人で、移住までしてしまうひとたちの大半は、  
『リアルな生』を求めているのではないのでしょうか。バカンスで滞在するひとたちが求める一時  
的なエキゾチズムとは異なる『深いところからの人間的要求』を私は持っているのです」と  
いう。

#### （「寄港地」という神話）

メルッチは、本稿の冒頭に引用した「惑星社会」についての記述の後、「私たちは、しっかり  
とした錨をおろせる場所（anchor points）を渴望しているにもかかわらず、自分の記憶を辿っ  
ても『確固たる自己』に相当するものを認識することは出来ず、……自分のための『寄港地  
（home）』をつくり、しかもそれを何度も何度もつくり直さねばならないのだ」<sup>23)</sup>と言葉を続け  
ている。

「寄港地」を求める彼以外の客は、イタリア人女性の二人連れ、夫婦ではないがいっしょに旅  
をつづけているという中高年のカップルなどで、彼らに共通していたのは、「私はなにものか」  
という「自己」をめぐる問いが、家族や仕事など、すべてに優先しているということだった。  
移住をほぼ決めていた女性は、ミラノで仕事をつづける夫との関係については「まだ調整中」  
だという。別の男性も、いまは家族がなく（離婚）、もし誰かと来るとしたら、会社経営をして  
いる別の友人とやって来るかもしれないと言っていた。

今度はサントメプリンチペで暮らしたいという店主は、目をわずらっていて（緑内障）、かな  
り難しい手術が必要なのだが、カーボベルデではその手術が出来ないので、奥さんは、これを

機会に、故郷のジェノヴァに帰りたがっていた。ジェノヴァには家も残してあり、現在の生活が体力的に無理となったら、いずれはもどりたいと思う。しかし、夫はまだまだ「旅をつづけ」たがっており、出来るだけつきあってあげたいが、身体のこと心配なのだ。この後、店主夫妻はイタリアにもどり緑内障の手術を受けたが末期癌であることが分かり、程なく父祖の地ジェノヴァで永眠した。シダーデ・ヴェーリヤの店を引き継ぐものがなく閉店を余儀なくされ、「リアルな生」を求めてカーボベルデにやって来た「青年実業家」は、ひきつづきファッション業界での仕事をつづけている。

カーボベルデの物価はポルトガルよりほんの少し安いが、決して楽というほどではなく、ガソリンなどはむしろ高価だ。にもかかわらず、カーボベルデは、「ヨーロッパ人」により「寄港地 (home)」として「発見」されつづける。「バカンスは必ずとらなければならない、バカンスでどれだけ他のひとのいかない場所に行くか、どれだけ他のひとがしたことのない体験をしたかを語らねばならない」という「圧力」を感じている人間にとって、「カーボベルデでは、『本国』にいるときよりは、『本当の自分』になれる気がする。ここにやって来る『ヨーロッパ人』は、多かれ少なかれ似た感覚を持っていて、この土地に『癒される』のさ」。離婚や事業の失敗など、必要以上に聞かれたくないことを穿鑿されることもない。「選択」の「圧力」から解放されたいという要求が、カーボベルデの「発見」、個々人の「自分探し」や「移住」、これまでの生活からの「跳躍」や「離脱」の後押しをしている。そしてまたこの「寄港地」を求めするための「再帰的な旅」<sup>24)</sup> は、この過剰な「選択のパラドクス」の大きな流れのなかに存在しているのだ。

### 3-5. 考 察

“旅／フィールドワークする社会学”の終わりに、あらためてこれまでのカーボベルデでの知見をふりかえり、リスボンへと向かう飛行機のなかでメルレルとおよそ以下のような話をした。

カーボベルデが直面している問題は、グローバリゼーションのなかの「小国」「発展途上国」「島」「ローカルコミュニティ」の問題ということになる。しかもその問題は、グローバリゼーションとポスト・モダンのアンビヴァレントで不均衡な衝突・混交・混成・重合の問題であるが、そのなかには、「移民」「開発・発展」というモダンの問題と、「植民」というプレ・モダンからの問題とが衝突・混交・混成・重合している。この多重／多層／多面性を、地球規模の「クレオール化」に直面する現在を生きる個々人の身体の層まで含めて全体的にとらえ、メルッチは、「惑星社会」という言い方をしたのだと再解釈出来る。たとえば、アメリカのTV番組 Sex & the City が、この惑星各地の共通言語になると同時に、そのすぐ近くで、子供がロバに水を積んで運び、さらにその近くから、「メリルリンチで働く俊英」<sup>25)</sup> や「起業家」と、さらには都市の「ワーキングプア」が生み出されている。「高学歴ワーキングプア」が生み出される

のもあと数年のことだ。そのときには、カーボベルデはどのように変わっているだろうか。

サル島やサント・アンタン島、サンティアゴ島の北部で見た村々の生活が成り立っていくためには、貨幣経済以外の経済（家政／オイコノミア）が存在している必要がある。玉野井芳郎（1918～1985）は、K. ボランニーやI. イリイチを解読するなかで、貨幣経済へのオルタナティヴとしての「生命系の経済学」に理論的に到達したが、それ以上に重要だったのは、東京大学から沖縄国際大学に赴任して、まさにその場所（「臨場・臨床（*linikós*）」の場で）「生きられている経済（家政／オイコノミア）」を体感していった“道行き・道程（*passaggio*）”そのものだろう<sup>26</sup>。

玉野井が思索をめぐらした時代からさらに貨幣経済の不確定性は露呈しており、いまいちどの配置変え（*reconstellation/ricostellazione*）、メルッチの言葉に重ねていけば「惑星社会のオイコノミア」を考えることが求められている。この文脈／水脈においては、ポルトガルの「航海者」たちが他者と出会った場所における、その後の“道行き・道程（*passaggio*：移行，移動，横断，航海，推移，変転，変化，移ろい）”を辿り、それぞれの特定の場所において起こりつつあること（“未発の毛細管現象／胎動／社会運動”）を全体のなかで意味付けし直すことに深い意味を見いだすことが出来るとますます確信した。

たとえば、カーボベルデ大学のスタッフは、「国がつくった海水からの精製水が届く共同の水道まで、子供たちが遠くからロバをつれて水を汲みにいくことはたしかに困難をとまいませんが、そうすることで、アスファルト道路から離れた場所であらうじて農作業を営むひとたちの共同性が保たれ、ここから新たな『カーボベルデ人』が育っていくのではと期待しているのです」と言った。

メルレルの旧友であるサント・アンタン島のアントニオ神父やカーボベルデ大学のスタッフは、メルレルが紹介した「農村家族学校（*scuola famiglia rurale*）」<sup>27</sup>の運動に強い関心を示した。子供たちは親元から離れることなく、また伝統的生活そのままでもなく、かといって、地域の現実にまったくかみ合わずむしろその地域の生態系を破壊してしまうような知を別の場所で身につけるのでもない、等身大の技術教育とはいかなるものか、それはいかなる資金調達や制度的な整備によって可能かを彼らはしきりにしりたがっていた。

このような試みは、ひとつの“曼荼羅”のような構造を持つ「惑星社会」を前提とするのなら、どこからでも始めることは出来る。メルッチが言うように、「惑星社会」のなかの「アンカーポイント」として、カーボベルデの都市と農村での出来事を位置付け、ふりかえることが出来るということだろう。

#### 4. 結びにかえて——危機の時代の生態学としての社会学へ

以上のように、“聴くことの社会学”と“旅／フィールドワークする社会学”の具体的実践を

紹介してきたのだが、この試みは2012年の現在を生きる私たちにとっていかなる意味を持つだろうか。メルッチとメルレルとの対話からまとめてみる。

「惑星社会」においては、「実体化し資本化した情報(ゲノムやナノも含めて)」による社会システムへの「ここにもないほめ言葉 (lodi fittizie)」が持つ脆弱さが露呈している。ここから想起されたのは、“見かけ倒しの拙速社会 (società fittizia e rapida)”という言葉だ。コーティングによって装飾された外皮が剥ぎ取られ、これまで「危機の瞬間」に一時的に開いていたかのように見えた「間」や「隙間」や「裂け目」が「収束に向かう」という方向性は、なかなか見いだせない。“メタモルフォーゼの境界領域”の「穴」や「淵」が可視の領域に居座り続け、「見知らぬ明日」が常態化しつづける。

2000年5月、メルッチが「カタストロフ」に言及したとき、聴衆のなかには、白血病を患っていた彼が、「自らのミクロな身体的条件を、社会のマクロな状況に、無理矢理重ねてしまっているのではないか」と言ったひといた。ところが、この講演の翌年の2001年9月11日、実は常に、「伏流水」として強固に存在してきた“瓦礫や廃墟の切れっ端 (rovinaccio)”は“破局へと至る瓦礫 (andare in rovina)”“未発の瓦礫 (macerie/rovine nascenti)”が顕在化した<sup>28)</sup>。そこからまた10年の後、2011年3月11日を私たちは体験した。

2011年3月11日の大震災で、もっとも大きな被害を受けた地域は、津々浦々の地域小社会であり、もっとも深い喪失に直面しているのは、何世代にもわたって地域小社会の生活と文化を担ってきたひとびとである。近年こうした土地は、「解体」の側面から論じられてきた。「3.11」以後に「私的生活を営む」(メルッチ)ことの困難とともに、かえって明らかになったのは、地域生活者たちがもつ「変容」や「超越」への“責任/応答力 (responsibility)”であった。「グローバリゼーションにとまなうローカルの『再審』」(古城利明)は、日常性がこわれて新たな枠組みが見えないなかで格闘せざるを得ない被災者や病者、各々の個性の奥深くを揺るがすような個別的な「事件」に直面し、徒手空拳で応答せざるを得ない瞬間をきちんと迎えることを抜きにしてあり得ない。

産業社会の勃興期には、「社会という大きな森」をとらえようする「巨人」が複数存在した。しだいに学問として制度化した社会学は、複数の技法を開発し「木」の状態をひとつの変数で説明することに「成功」した。「危機」の瞬間になって、「木を見て森を見ない」という隘路に気づき、いま岐路にたたずんでいる。社会学は、国家でも市場でも神でもない、人間の「生活の場」である社会という存在に気付いたところから始まる。社会が、一個の「生き物」として独自の動きをするという直観である。この直観に基づき、個々の条件下で、社会はどのような動きを示すのかを、一個の「生き物」として存在する個々人の動きとは別の法則性を持つものとしてとらえようとした。

一個の「生き物」としての社会のなかには、これまた独自の法則性を持って動く社会集団や